
「第7回特発性心室細動研究会」特集号の発行にあたって

特発性心室細動研究会 (J-IVFS) 代表幹事 平岡昌和

(東京医科歯科大学名誉教授・労働保険審査会)

特発性心室細動研究会は、Brugada症候群を含む特発性心室細動に関する大規模研究を実施する傍らで、年に一度、調査研究の報告とそれに関連する諸問題を取り上げて討議する場を設けている。本号は、平成21年2月14日に東京で開催された第7回研究会の内容をまとめた特集号である。

研究会の前半では、これまでに集積された264例を基に事務局から「Brugada症候群症例の臨床経過について」と題した報告がなされ、次いで一般演題として「NMS(神経調節性失神)を合併したBrugada症候群の特徴とその治療」をテーマに6題の成績が発表された。後半は、最初に事務局より「無症候性Brugada症候群に関する全国アンケート調査結果」について報告され、引き続き一般演題として「無症候性Brugada症候群に対するEPSの適応」をテーマに5題の発表が行われた。

外国人招待講演者による恒例のEvening Seminarでは、オランダのDr. Arthur AM Wildeが登壇し、「Brugada syndrome and idiopathic ventricular fibrillation, new developments」という演題で講演を行った。Dr. WildeはBrugada症候群の診断基準を提唱したConsensus reportの責任者であり、多くの業績を発表している第一人者である。彼はBrugada症候群に関するこれまでの成果を踏まえ、新たに欧州で行われている大規模研究の結果を紹介し、さらにBrugada症候群と異なり、J波を呈するIdiopathic ventricular fibrillationの話題など、興味ある最新の知見についても発表した。

本特集号では、我が国におけるBrugada症候群の臨床経過と心事故発生の頻度、その予測因子が浮かび上がっているほか、NMSとの合併頻度やその対策、さらには無症候群に対するEPS検査やその適応に関する各施設での経験が蓄積されており、充実した内容となっている。

ご一読いただくことで、当日の興味ある発表内容を少しでも汲み取っていただけると希望しているものである。

平成21年6月